

出前美術館 ―学校・地域との連携事業の可能性―

杉本 藍

1. 美術館における教育普及の役割

美術館には4つの役割がある。それは「調査研究」「収集と保管」「展示」「教育普及」であり、それらは相互に関係している。その中で、教育普及活動とは美術の理解を深めるために行う活動である。対象は、美術に関心のある子どもから大人までの全ての人である。内容は作品制作や鑑賞、ワークショップなど多岐にわたる。

新潟市美術館での教育普及事業の取り組みは、大きく分けて5つ挙げられる。一つは、学校との連携で、具体的には出前美術館、オープンギャラリー、教職員視察ウィーク、団体観覧、施設見学、職場体験などが挙げられる。二つ目は、子ども対象の講座で、子どものためのギャラリーツアー、夏休み子ども講座などが挙げられる。三つ目は、一般対象の講座で、美術講座や実技講座などが挙げられる。四つ目は、展覧会関連イベントで、コンサートや講演会、パフォーマンスなどのイベントが挙げられる。ここでは出前美術館について考察する。

新潟市美術館は公立の美術館として1985年の開館以来、「みる、つくる、語る」の基本的性格を掲げ、取り組んできた。より具体的に、以下の構想理念を新たに掲げ、美術館運営を進めている。

- ① 「あるもの（館藏品を含む地域の多様な文化資源・自然環境）」を活かし、
新たな知を掘り起こす、「発見する美術館」
- ② 教育普及の事業を通じて、あらゆる世代の市民が「学べる美術館」
- ③ さまざまな芸術が交差し、訪れるたびに心躍る「生きている美術館」
- ④ 市民同士、地域の文化施設相互が「つながる美術館」
- ⑤ 高い質を保ち、市民が誇れる「信頼の美術館」

教育普及は上記の5つの構想理念の中で、②、③、④に関係し、出前美術館は②、④と関係している。

2. 学校との連携について

出前美術館の考察に入る前に、なぜ、美術館は学校と連携すべきかを述べる。日本の美術館はその草創期から主体的に教育普及活動を行ってきたわけではない。1980年代に入り、地方の公立美術館開館が進む中で、徐々に教育普及活動は意識されるようになってきた。公立美術館の開館が市町村のレベルにまで及び、市民との距離が近くなったことや社会教育施設として位置づけられていたことも一因である。1980年代後半になると、各館は教育普及活動に一層力を入れるようになった。そして、美術館の地道な取り組みが、徐々に学校へも認知されるようになってきた。

教育普及活動は、来館者が美術の理解を深めるために行うものである。教育普及活動の中でも重要な役割の一つとして、次世代を担う鑑賞者の育成がある。その具体的な取り組みとして、「鑑賞」教育が挙げられる。「鑑賞」教育は、本物の美術品をみる体験を提供し、美術の楽しさや面白さに気づいてもらうきっかけをつくることを目的としている。これは美術館活動の役割の一つである美術品の「収集と保管」と関係している。「収集と保管」とは優れた美術品を体系的に蓄積し、半永久的に保存することだが、それは美術館で美術品を享受する鑑賞者がいてこそ意味のあることだ。また、美術品の「展示」には、鑑賞者が必ず必要である。未来の鑑賞者とは、子どもたちである。学校と連携し、「鑑賞」教育を行うことは、従って「収集と保管」、「展示」とも深く結びついている。

日本の美術館で30年近く行われてきた「鑑賞」教育が、近年、学校現場で注目されるようになってきた。これまで、学校教育（図画工作科や美術）では、作品を「つくる」教育が中心であったが、作品をみる「鑑賞」教育が見直されるようになったからだ。この見直しは、2008年の小学校・中学校の学習指導要領の改訂にもみることができる。

- ① 【総則】中学校「第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」2-（13）「…部活動については（中略）社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との運営上の工

夫を行うようにすること」

②【図画工作科】小学校「第3指導計画の作成と内容の取り扱い」2- (5)「各学年の「B鑑賞」の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、**地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること**」

③【美術】中学校「第3指導計画の作成と内容の取り扱い」2- (2)「各学年の「B鑑賞」の題材については、日本及び諸外国の児童生徒の作品、アジアの文化遺産について取り上げるとともに、**美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること**」

④【総合的な学習の時間】小学校・中学校「第3指導計画の作成と内容の取り扱い」2- (6)「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、**博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携**、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと」

⑤【特別活動】小学校「第3指導計画の作成と内容の取扱い」1- (1)「(前略)また、各教科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間などの指導の関連を図るとともに、家庭や地域の人々との連携、**社会教育施設等の活用などを工夫すること**」

⑥【特別活動】中学校「第3指導計画の作成と内容の取扱い」1- (1)「(前略)また、各教科、道徳及び総合的な学習の時間などの指導との関連を図るとともに、家庭や地域の人々との連携、**社会教育施設等の活用などを工夫すること**」

(緒方泉「人々の学習活動を支える博物館の役割」『社会教育』全日本社会教育連合会、第65巻8月号、2010年8月、p.18)

以上をみると、小学校及び中学校で図画工作科及び美術だけでなく、総合的な学習の時間や特別活動、部活動でも美術館の利用について触れられている。このような背景もあり、新潟市美術館では学校との連携事業として、2008年より新たに、「オープンギャラリー」¹と「出前美術館」を行うこととなった。

¹「オープンギャラリー」とは、学校の教員が美術館職員と共に、美術館で開催している企画展・コレクション展の出品作品を通して、作品鑑賞の授業を行う事業。美術館でバスを用意し、園児・児童・生徒の送迎を行っている。美術館の展示室を学校の教室として開放し、学校の教員が鑑賞の授業を行っている点が特徴的だ。

3. 出前美術館の取り組み

出前美術館は美術館に来館する機会の少ない児童・生徒たちに作家や作品に触れ合う機会を提供し、美術の魅力を感じてもらうことを目的としている。また、学校という地域の拠点を利用することで、児童・生徒のみならず、保護者や校区住民にも広く鑑賞してもらう機会となることを期待している。

本事業は、2008年から行っている。当初は版画作品を学校へ1週間ほど貸し出し、展示する。その間に美術館職員が学校へ行き、作品鑑賞会などを実施するという内容だった。2年間で15校で各1回実施され、9,474人が参加した。

現行の作家を学校へ派遣するやり方になったのは、2010年からだ。特に、新潟市に在住または在勤、地域に拠点を置いて制作する作家に児童・生徒が会えることができるという点の特徴的だ。また、洋画や日本画、版画、彫刻、工芸、書というジャンルの美術に触れることができるよう、特定のジャンルに偏らず、さまざまなタイプの作家に依頼している。美術は多様で多彩であることを知ってもらうためだ。

地域に拠点を置いて制作する作家は、地域の風土文化に根ざした制作活動を行っているので、子どもたちにとってもより身近な存在であり、共感しやすい。また、美術館にとっても地域の作家たちの制作のありさまを知る良い機会となる。このような点から地域に根を下ろし、活動する作家たちに依頼している。

現在の出前美術館となったきっかけは、洋画家の西村満氏の作品が新潟市内の中学校に多く遺されていることだった。西村氏は新潟の風土への愛着や失われていくものへの郷愁から

「北の浜辺」をテーマに、海岸や平野の風景を多く描いている。西村氏はかつて美術教員として市内の中学校に勤務していたが、既に退職し、10年以上経つ。西村氏がかつて勤務していた校内に展示されている作品を生徒は目にしているけれども、どんな作家がどのような思いで描いたか分からない。作家に講演してもらい、その作品を鑑賞することが、生徒にとってよい刺激となるのではないかとの思いから、地域の作家を学校へ派遣する出前美術館が生まれたのである。

内容は、市内の各小・中・高等学校に作家が出向き、作品についての講演やワークショップ（制作体験）等を行い、作品の展示も会場にあわせて行うというものである。

これまで、小・中・高等学校（不登校児童の通う教育相談センターも含む）あわせて23校33回実施し、3,331人が参加している。参加者の中には、児童・生徒をはじめ、教職員や保護者、校区住民も含まれている。

図1 平成22(2010)年度の出前美術館の実施状況

(単位：人)

日時	実施学校・会場名	事業名・関連出前授業	児童・生徒	一般(含職員)	参加者数合計	
12月3日、10日	新潟市立新津第二中学校／美術選択・美術部・教職員	皆川徳志(版画家)：ワークショップ 「出前美術館－皆川先生と版画の世界を楽しもう－」 *実技指導：石膏版画づくりワークショップ	50	4	54	
1月21日	新潟市立浜浦小学校／児童・保護者・地域・教職員	西村 満(画家)：講演会と作品鑑賞 「出前美術館－西村満先生の絵画の世界」	251	26	277	
1月27日	新潟市立岡方第一小学校／4、5、6年生・教職員	西村 満(画家)：ワークショップ 「出前美術館－西村満先生の絵画の世界－」 *実技指導：西村満先生とデッサンの模写をしよう!	60	6	66	
2月8日	新潟市立白新中学校／1年生・教職員	西村 満(画家)：ワークショップ 「出前美術館－西村満先生の絵画の世界－」 *実技指導：西村満先生とデッサンの模写をしよう!	69	3	72	
2月9日、16日	新潟市立両川中学校／1、2年生・教職員	皆川徳志(版画家)：ワークショップ 「出前美術館－皆川先生と版画の世界を楽しもう－」 *実技指導：モノタイプ版画ワークショップ*	124	12	136	
実施校計5校 7回			合計	554	51	605

図2 平成23(2011)年度の出前美術館の実施状況

(単位：人)

日時	実施学校・会場名	事業名・関連出前授業	児童・生徒	一般(含職員)	参加者数合計	
9月15日	新潟市立内野中学校／全校生徒・教職員	猪爪彦一(画家)：講演会と作品鑑賞「猪爪彦一さんをお招きして」	610	10	620	
9月27日	新潟市立栄小学校／4年生・教職員	霜鳥健二(彫刻家)：ワークショップ「大地の芸術祭の作品をみんなで体験しよう-自分のシルエット作り-」*実技指導：画用紙を使って、人影づくり	27	3	30	
10月4日	新潟市立舟栄中学校／全校生徒・地域・教職員	西村 満(画家)：講演会と作品鑑賞「舟栄と私-絵を通して-」	250	11	261	
10月30日	新潟市立江南小学校／全校児童・地域・教職員	猪爪彦一(画家)：講演会と作品鑑賞「洋画家『猪爪彦一』作品展」	542	194	736	
11月10日	新潟市立新潟江南高校／美術選択1、2年・教職員	猪爪彦一(画家)：講演会と作品鑑賞「猪爪彦一さんの作品を鑑賞しよう!」	70	10	80	
11月28日	新潟市立立山小学校／4年1、2組(2回)	皆川徳志(版画家)：講演会と作品鑑賞「木版画ってなに?」	73	6	79	
1月20日	附属新潟中学校／1年2組	霜鳥健二(彫刻家)：講演会と作品鑑賞「美術と社会との関わり」	40	2	42	
実施校計7校 8回			合計	1,612	236	1,848

図3 平成24(2012)年度の出前美術館の実施状況

(単位：人)

日 時	実施学校・会場名	事業名・関連出前授業	児童・生徒	一般(含職員)	参加者数合計	
7月3日	新潟県立新潟中央高校／美術選択1、2年・教職員	猪爪彦一(画家)：講演会と作品鑑賞 「一つの作品ができるまで」	20	2	22	
9月11日	新潟市立白根小学校／6年生・教職員	猪爪彦一(画家)：講演会と作品鑑賞 「本物の作品をみよう！」	99	7	106	
9月12日・13日	新潟市立山田小学校／6年1、2、3組・教職員(3回)	榎谷一代(日本画家)：講演会とワークショップ 「あなたの笑顔がすき」 *実技指導：1本のクレパスで人物をかくワークショップ	90	3	93	
9月20日・21日	新潟市立白根小学校／5年1、2、3組・教職員(3回)	榎谷一代(日本画家)：講演会とワークショップ 「今日の自分の顔をかこう！」 *実技指導：1本のクレパスで人物をかくワークショップ	93	3	96	
9月24日	新潟市立大野小学校／6年1、2組・教職員(2回)	榎谷一代(日本画家)：講演会とワークショップ 「お友だちの顔をかこう！」 *実技指導：1本のクレパスで人物をかくワークショップ	73	2	75	
9月27日	新潟市立潟東西小学校／5、6年生・教職員	菅井甚右衛門・哲(書家)：講演会とワークショップ 「象形文字をかこう！」 *実技指導：色画用紙と色絵具で、干支の象形文字をかくワークショップ	20	3	23	
10月5日	附属新潟小学校／3年1組・保護者	小飯塚真理子(ファイバーワーク造形作家)：講演会とワークショップ「まほう教室をつくらう！」 *実技指導：紙の廃材を用いて立体作品をつくるワークショップ	38	31	69	
11月12日	新潟市立結小学校／5年生・保護者・教職員	猪爪彦一(画家)：講演会と作品鑑賞 「本物の作品をみよう！」	108	11	119	
11月20日	新潟市立巻南小学校／5年1、2組・教職員(2回)	菅井甚右衛門・哲(書家)：講演会とワークショップ 「象形文字をかこう！」 *実技指導：色画用紙と色絵具で、干支の象形文字をかくワークショップ	40	7	47	
12月11日	新潟市立大野小学校／5年生・教職員	菅井甚右衛門・哲(書家)：講演会とワークショップ 「象形文字をかこう！」 *実技指導：色画用紙と色絵具で、干支の象形文字をかくワークショップ	81	8	89	
1月8日	新潟市立月潟中学校／全校生徒・地域・教職員	菅井甚右衛門・哲(書家)：講演会とワークショップ 「今年の一字をかこう！」 *実技指導：色画用紙と色絵具で、干支の象形文字をかくワークショップ	96	15	111	
1月17日	教育相談センター／不登校児童(5年生～中学生)・教職員	菅井甚右衛門・哲(書家)：講演会とワークショップ 「象形文字をかこう！」 *実技指導：色画用紙と色絵具で、干支の象形文字をかくワークショップ	19	12	31	
実施校計11校 17回			合計	777	104	881

2010年は洋画家の西村満氏、版画家の皆川徳志氏の2作家。2011年は、前記西村氏、皆川氏に加え、洋画家の猪爪彦一氏、彫刻家の霜鳥健二氏の4作家をお願いした。2012年は前記猪爪氏に加え、日本画家の榎谷一代氏、ファイバーワーク造形作家の小飯塚真理子氏、書人の菅井甚右衛門・哲氏の4作家であった。各作家は、通常の作品制作の延長線上でワークショップを考案したり、講演を行っている。講師の先生方には、2年交代でお願いしている。

これらの中で、(1)洋画家の猪爪彦一氏、(2)彫刻家の霜鳥健二氏、(3)書人の菅井甚右衛門・哲氏の3作家の出前美術館について考察する。どのような年齢層に対し、どんな内容で行うのか、比較対象しやすい例を取り上げることにした。猪爪氏は、作品鑑賞と講演会を中心に、小学校、中学校、高等学校それぞれで実施している。霜鳥氏は小学校でワークショップを行った。菅井氏は中学校で作品鑑賞と作家によるパフォーマンス、生徒が制作体験を行うワークショップを行った。一度に大人数が参加できるワークショップを行ったという点でも特徴的である。

(1) 洋画家の猪爪彦一氏(1951年～)による事例

猪爪氏は、独学で絵画を学び、行動美術展や安井賞展などに出品。家業の畳屋と両立しな

から作家として活動している。新潟市美術館では、《祖父のたまご》(図4) 油彩1点を所蔵しており、子どもたちや学校の先生からも人気が高い。

朱赤や漆黒を基調に、浮遊する人物や卵、針のない時計などが描き込まれた幻想的な風景を多く描いている。猪爪氏は、2011年、2012年の2年間で小・中・高あわせて6校各1回ずつ行った。ここでは、新潟市立江南小学校、新潟市立内野中学校、新潟県立中央高等学校についてそれぞれ記述する。

①2011年10月30日(日) 新潟市立江南小学校(江南区)

(a) 講座概要

参加者：736人(全校児童：542人、保護者・地域・教職員：194人)

会場：体育館(作家や作品の紹介)

木の部屋(普通教室2つ分、作品展示)

展示内容：油彩画50号2点、30号4点の計6点

工程：08:40～08:50(10分) 校長のあいさつ

08:50～09:05(15分) 児童による作品の発表

09:05～09:20(15分) 講演

(移動・準備)

10:00～12:00(120分) 自由鑑賞

(b) 講演内容

創立30周年記念の文化祭にあわせて、出前美術館を実施した。講演は、プロジェクターで作品画像を投影しながら行われた。《夜の風景》という作品を例に挙げ、制作について話した。「昼間は家業に従事しているため、制作は夜に行っている。夜、仕事場からアトリエまで歩く中でみた景色を作品として描いているので、夜をテーマとした風景作品が多い。また、日常生活で、気に入ったものはアトリエに持ち帰り、絵の中に描き込んでいく。絵を描くことの魅力は、自分だけの世界を創造できるからだ」という。「筋道のあるものはおもしろくない。」児童へのメッセージは「作品をみて自由に物語をつくってもらいたい」とのことだった。その後、自由観覧となった。友だちどうしや親子連れで作品を鑑賞しながら、互いに話し合い、作家に質問する光景もみられた。

②2011年9月15日(木) 新潟市立内野中学校(西区)

(a) 講座概要

参加者：620人(全校生徒：610人、教職員：10人)

会場：体育館

展示内容：油彩150号2点、100号1点、50号1点、版画2点の計6点

工程：13:30～13:55(25分) 1年生鑑賞

14:00～14:40(40分) 講演

14:40～15:00(20分) 質疑応答

15:00～15:10(10分) 3年生鑑賞

15:10～15:20(10分) 2年生鑑賞

(b) 講演内容

講演は、画家をめざしたきっかけや大切に思っていることについての話が中心だった。小学生の時に、はじめて油絵を描き、その魅力に魅せられた。中学では、美術部と合唱部に入った。高校卒業後は家業の畳屋を継ぐことが決まっていたので、高校では好きなことをまっとうした。絵を描くことだけでなく、音楽に興味を持ち、指揮や作曲に熱中した。本もたくさん読んだ。この経験が今の自分の軸となっている。何でもよいので興味のあることに、どんどん挑



図4 猪爪彦一《祖父のたまご》
1996年、新潟市美術館蔵



図5 新潟市立江南小学校での自由鑑賞の様子
前方右から2人目が作家



図6、7 新潟市立内野中学校での様子



図8、9 新潟中央高等学校での様子
作品に囲まれて講演を聴いた。

戦してほしい。大切なことは、絵は上手下手ではない。気持ちが込められた絵こそが、見る人に伝わると考えている。

このように、生徒の視点を広げる講演内容となった。

③2012年7月3日(火) 新潟中央高等学校(中央区)

(a) 講座概要

参加者：22人(美術部の生徒：20人、教職員：2人)

会場：美術室

作品展示：油彩10号～30号、50号の6点、ドローイング3点の計9点

工程：14:00～14:25(25分) 講演

14:25～14:35(10分) 質疑応答

14:35～15:00(25分) 鑑賞

(b) 講演内容

講演は、夢を持つことと作品ができるまでのプロセスについてであった。

家業と両立しながら、25歳を目標に絵を描き続けた。一生懸命になること。あきらめないこと。人との出会いが大切だが、なにより楽しく描いていること、興味を持ち続けていることが絵を描く原動力となっている。家業も職人という意味で似ているが、仕事には目的があるのに対し、絵には目的がないのも魅力だ。制作は、同時に何枚もの作品を描いている。アトリエには、版画、油彩、ドローイング、立体とコーナーが分かれた未完成の山があり、その日の気分で描けるところから描いていく。これまでに、制作ノートは100冊以上となっている。日々の生活の中で、作品のテーマを探しており、言葉から着想を得ることも多い。ドローイングと呼べるかどうか分からないが、チラシの裏に書き溜めたものの一部を持ってきた。制作ノートの前の段階のものだ。

このように、一つの作品ができるまでには、さまざまなプロセスを踏んでいることを理解できる内容だった。

(c) 分析

ア 学校の規模

小・中・高等学校いずれにおいても共通するのは、作品鑑賞の場合は大人数での実施が可能であること。それゆえ、児童、生徒、教員だけでなく、校区民まで参加できる利点がある。

イ 対象者の年齢

小・中・高等学校で比較すると、作家自身も講演に際し、対象年齢に合わせて、ことばを変えているが、児童や生徒の反応も異なる。児童は、画面に使われている色や作品の中に描かれているものなど作品そのものに興味を持っていた。

中・高等学校の生徒は、猪爪氏の家業を継ぎながら、作家として好きなことを続けてきたという姿勢にも関心を寄せていた。高等学校から、学芸員の仕事を間近でみることのできる機会だったので、その点もふれてほしかったという要望があったことから、展示を含めた内容の改善が必要だ。

ウ 実施時間

小学校では45分、中学校、高等学校では50分という時間の制約があるため鑑賞時間が15～20分と短くなってしまいう傾向があることが問題点だ。江南小学校では、授業時間の制約を受けない文化祭に併せて実施していたため、ゆとりを持って鑑賞することができた。

(2) 彫刻家の霜島健二氏（1955年～）による事例

霜島氏は、日本大学芸術学部美術学科彫刻科を卒業後、グループ展や個展で発表を続け、2000年の「大地の芸術祭」に出展して以来、2006年、2009年、2012年と参加。また、2001年から隔年で新潟県弥彦村で開催している「弥彦・野外アート展」では、中心的なメンバーの一人。現在は新潟県立長岡高等学校美術科に勤めている。鉄を素材とし、その場の風景と溶け込み、呼応するような彫刻作品を制作している。霜島氏は、2011年に、小学校1校、中学校1校で各1回実施した。ここでは、新潟市立栄小学校の例について記述する。

①2011年9月27日（火） 新潟市立栄小学校（中央区）

(a) 講座概要

参加者：30人（4年生27人+教職員3人）

会場：図工室（制作）、展示（教室、廊下、階段、体育館など校舎）

準備：【学校】 撮影・投影 ・デジタルカメラ、三脚、プロジェクター 各2台

四つ切り画用紙（白・黒各一枚）、カッター、はさみ、カッターマット

【美術館・作家】（予備として）サインペン15本、消しゴム21個、鉛筆28本、

カッターマット26枚、鉄で作った子供の人型一式

工程：9:30～9:40（10分） 説明

9:40～9:55（15分） ①ポーズを取って、写真撮影

* 予め2グループに分かれ、順番決めておく。

* これ以降は、流れ作業で、ほぼ同時並行に作業は進む。

9:55～10:45（50分） ②画用紙にプロジェクターとPCで写真を投影し、サインペンで輪郭線をなぞる。

③カッターやはさみで輪郭線を切る。

④黒い画用紙に、人型をのせ、鉛筆でなぞる。

⑤カッターやはさみで黒い画用紙を人型に切る。

10:45～11:00（15分） 展示と講評

* 黒板の前で、白い作品のみマグネットで展示し、同じポーズをして、記念撮影。

(b) 講座内容

文化祭に向けて学校ににぎわいをつくる作品制作、展示したいという要望から、人影を切り絵のようにつくるワークショップを行った。この人影の作品は、霜島氏が2006年の「大地の芸術祭」において足滝集落で発表したもので、過疎化の進む越後妻有地域の記憶を人影に託した鉄の作品が基となっている。展示を行った文化祭当日は、完成した作品をさらに増やし、4年生の教室や廊下だけでなく、体育館や踊り場のガラス窓、階段などにも人型の作品を展示し、校内全体に展開していた。

(c) 分析

ア 学校の規模

一学年30人弱の少人数の学校であったため、一回で一学年全体での実施が可能だった。

イ 対象者の年齢

「カッターに使い慣れない児童のよい練習にもなった」と学校から指摘があった。また、「カッターの苦手な児童に、得意な児童が手助けする場面があり、思いやりの心も育むことができた」という意見が学校から寄せられた。

ウ 実施時間

45分授業を2時限連続で行ったため十分な時間があった。制作時間を考えると、この時間配分が望ましい。



図10 新潟市立栄小学校での様子
作家が作品の説明をしている。



図11 文化祭での様子
窓に作品を展示し、校内ににぎわいをつくった。



図12 霜島健二「記憶-記録」足滝の人々
2009年、大地の芸術祭2009、撮影：安齋重男

(3) 書人の菅井甚右工門・哲氏（1940年～）による事例

菅井氏は、新潟大学芸術科書道科を卒業後、高等学校の教員として勤めた。かつて、新潟中央高等学校や新潟高等学校などで教鞭を取っていたこともあり、教え子が教師となり、「出前美術館」に手を挙げた学校もあった。和紙と墨を用いて文字をかく書の作品だけでなく、カーテン生地や砂、板、発砲スチレンなどの素材にアクリル絵具や隙間材などで文字をかく立体作品も制作している。菅井氏は、2012年に、小学校2校、中学校1校、不登校児童が通う教育相談センター1校の4校で計5回実施した。ここでは、新潟市立月潟中学校のケースについて記述する。



図13 新潟市立月潟中学校でのパフォーマンスの様子

①2013年1月8日（火） 新潟市立月潟中学校（南区）

(a) 講座概要

参加者：111人（全校生徒96人+地域・教職員15人）

会場：ランチルーム（体育館より多少小さい）

準備：【学校】ビニールシート、絵の具（ポスターカラー）、画用紙（四つ切） 歯ブラシ、はけ、筆、スポンジ・トレイ皿、バケツ、筆洗、ぞうきん、新聞紙

【作家・美術館】和紙（1100×4000）、黒マット紙（1100×4000）、筆、墨汁、アクリル絵具（ピンク、青、黄色、緑）、養生テープ、イーゼル2脚、カッター、はさみ、金尺、さらし、軍手、バケツ

作品展示：計8点（カーテン生地の作品2点、砂の作品1点、板作品5点）

工程：13:30—13:40（10分） 講師紹介、鑑賞の注意（美術館職員）

13:40—13:55（15分） 作品の説明（講師）と作品鑑賞

13:55—14:15（20分） パフォーマンス

14:15—14:25（10分） 準備、説明（美術館職員、講師）

14:25—15:00（35分） 作品制作

15:00—15:30（30分） 展示と講評



図14 作家が指導する様子、画面中央左が作家

(b) 講座内容

菅井氏が舞台上に展示された作品を説明した後、ブルーシートが敷かれた会場の真ん中で文字のパフォーマンスを行った。はじめは、白い大きな和紙に、大きな筆を使って、黒い墨で「龍」の文字。次に、黒い大きな紙に、黄色、緑、ピンクといった色とりどりの顔料を筆につけ、「巳」の文字。特にカラフルな色を使っている文字のパフォーマンスは、筆の動きに注目させるためだ。筆は一つの方向、角度で用いるのではなく、いろいろな方向、角度で書いていることを視覚的に理解してもらいたい意図があった。サインは筆ではなく、手の指を使って書く。その後は、生徒たちの制作時間。象形文字について事前学習を行っている。十二支の中で、自分の干支、今年の干支、家族の干支を選び、色画用紙に色絵具でかく。パフォーマンスで手の指を使ってかいていることに刺激された生徒たちの中には、手で書く生徒もみられた。「先生の一番好きな文字は何か」「なぜ書家になったのか」という質問に、「好きな文字は愛」「字をかくことは好きだったけれど、字が上手でなかったからだ」と答えた。特に字が上手でなかったから、書家になったという話に生徒は意外だという驚いた反応を見せていた。

(c) 分析

ア 学校の規模

全校生徒100人弱の学校であったため、学校全体で取り組むことができた。

イ 対象者の年齢

色画用紙に、色絵の具を用いたこと。使う道具も歯ブラシやスポンジであったこと。これらは、学校の授業の中では思いつかない、新鮮な体験だったとの意見が学校から寄せられた。

ウ 実施時間

2時間使うと充分である。作品鑑賞、パフォーマンス、生徒による作品制作というそれぞれのステージは時間で区切られており、また、中学生ということもあり、集中力は持続していた。しかし、作品鑑賞の時間が少なかったため、休み時間などを利用し、事前に鑑賞する時間を取るとよかったかもしれない。

4. 課題と可能性

以上3人の作家によるケースをまとめると、鑑賞、ワークショップを含む小・中・高等学校での出前美術館の実施の共通課題が浮かび上がってくる。

ひとつは、十分な時間が確保できるかどうかという点である。江南小学校のように文化祭の日を利用するなど、ゆとりを持って時間を組める日に設定したり、内野中学校や月潟中学校のように、時間の配分を学校全体で工夫し、設定することも考えられてよい。

学校全体での取り組みは、講演と鑑賞を組み合わせた出前美術館においては実現しやすい。しかし、制作をふくむワークショップの出前美術館となると容易ではない。ただし、月潟中学校のように、1学年が約30人、全校生徒90人ほどであれば、菅井氏の制作の方法でも可能となる。大人数でも取り組み可能なワークショップ形式の出前美術館を菅井氏だけでなく、さまざまな講師にも適用提案することも、考えることができる。また、学校側も栄小学校のように、実施は小学4年生だけであったとしても、文化祭で展示を行うことで、他の学年に波及させるような仕組みを考える余地がある。

地域の参加を促すには、江南小学校のように文化祭と同時期に実施するのもよい。全校生徒を対象とした内野中学校や月潟中学校での出前美術館は、学校側の広報により、保護者や校区民の参加が実現していた。その意味では、学校からの広報も適切だ。栄小学校のように、出前美術館に伴う展示を文化祭で行うことも間接的ではあるものの有効ではないか。

新潟市は2007年に合併し、日本海側唯一の政令指定都市となり、中央区、東区、西区、北区、江南区、秋葉区、南区、西蒲区の8区となった。それに伴い、新潟市の規模も拡大し、総人口は807,500人（平成25年2月末日現在）に達している。新潟市内には小学校113校、中学校61校、高等学校32校、養護学校10校あり、児童、生徒数は75,710人（小：40,471人、中：20,543人、高：14,515人、特別養護：195人）に及ぶ。（平成25年2月末日現在、新潟市教育委員会 HP、新潟県教育委員会 HP 参照）

2010年から2012年までの3年間で、小・中・高等学校（不登校児童の通う教育相談センターも含む）あわせて23校34回3,331人の実績は、新潟市内の学校数、生徒数に比して、必ずしも十分とはいえない。出前美術館の講師の報酬費等は、単年度予算で生まれ、8校10回分の経費が計上され、実施している。この8校は各区1校で割り当てられているのだが、区によっても学校によっても偏りがあり、新潟市内の小・中・高等学校の児童、生徒に、同じ機会があるわけではない。なお、2013年度から新潟市新津美術館と協働で出前美術館を実施することとなり、新たな局面を迎える。実績をつくり、将来的には新潟市内の小・中・高等学校の児童、生徒、保護者、校区民に、同じ機会が与えられるようになればと思う。

出前美術館は、次世代の鑑賞者を育成するために始められた学校との連携事業である。この事業の取り組みの中で、保護者や校区民など地域からの参加があった。このことは、美術館の想定を超えた副産物であったが、結果的に美術館の地域への働きかけの契機となった。出前美術館を学校で行うことは、美術館活動への地域の関与を促すという可能性に満ちていることが分かってきたのである。

次に、次世代を担う鑑賞者の育成として、果たして「出前美術館」は機能しているだろうか。出前美術館の目的は、美術館に来館する機会の少ない児童・生徒たちに作家や作品に触



図15 新潟市内の出前美術館を行った小・中・高等学校の分布図
（小：14校 中：7校 高：2校、2010～2012年）
※この地図の作成に当たっては、国土院院長の承認を得て、同院発行の数値地図200000（地図画像）を使用したものである。（承認番号 平19総使、第82号）
※信濃川、阿賀野川を書き加え、美術館、各学校を付記した。

れ合う機会を提供することである。作品鑑賞と講演を行った猪爪氏の出前美術館では、作家がどんな思いで、どのように描いたかという講演内容から児童・生徒たちの鑑賞の手助けをしたい意図があった。どこまで児童・生徒にその意図が伝わり、鑑賞する際の作品の見方に影響したのかどうか、判断する材料が、現時点ではあまりにも少ない。作品鑑賞と講演を行うタイプの出前美術館が、次世代を担う鑑賞者の育成へとつながる内容となるかは、継続した取り組みが必要だ。

では、ワークショップを行った霜鳥氏と菅井氏による出前美術館はどうか。まず、霜鳥氏による出前美術館について考察する。学校の教員は作家の作品を十分理解し、文化祭に向けて学校ににぎわいをつくる作品制作を行い、展示したいという要望をした。そして、その要望に基づいて、作家は人影を切り絵のようにつくるワークショップを提案した。最初に、作家は持参した人影の作品の一体を児童に見せながら、作品の説明をした。「地域の記憶を人影に託している。自分自身の気持ちを込めて、ポーズを取り、作品をつくってもらいたい。」このメッセージから制作がはじめられた。この霜鳥氏による出前美術館では、作品制作を通じて児童にこのメッセージが届いているかどうか判断するのは難しい。しかしながら、作家は通常の作品制作の延長線上でワークショップを考案しているので、作家のものの見方や捉え方を児童は体験したといえる。その点で、ものの見方が広がるきっかけにはなっただけで、間接的には作品を深く理解することにつながるのではないだろうか。

菅井氏による出前美術館はどうか。最初、作家は作品の説明をし、文字を書くパフォーマンスを行った。その後、生徒が文字を書く時間となった。生徒は、作品鑑賞、講師によるパフォーマンスの見学、作品制作という一連の内容を体験し、文字について多面的に捉えることができたのではないだろうか。生徒は作家が文字を書くパフォーマンスを間近で体感し、まさに作品が生まれる瞬間に立ち会う得難い経験をした。同時に、生徒は、作家にアドバイスを受けながら文字を書くという貴重な体験をした。生徒は創造の楽しさに触れることもできたのではないだろうか。

以上から、両氏のワークショップはどちらも作家の視点を通じてものの見方や捉え方が広がるきっかけになったといえる。児童・生徒が実際に手を動かし、能動的に美術に触れることができるという点が、ワークショップ型の出前美術館の大きな特徴である。

いずれにしても、作家を作品と共に学校へ派遣する「出前美術館」は、はじまって日がまだ浅い。3年を経て、新潟市内の小・中・高等学校へようやく認知されつつある。「出前美術館」が次世代を担う鑑賞者の育成へとつながる事業となるかは、地道な取り組みを重ねる中で見出され、その過程で新たな展開も期待される。

(新潟市美術館 学芸員)

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第1号 (平成24年度)
Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.1

発行日 / 2013年3月25日

編集・発行 / 新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL.025-223-1622 FAX.025-228-3051

印刷 / 株式会社 北都

©2013 新潟市美術館・新潟市新津美術館

ISSN 2187-6770